—

松本 力
本の話、本の町

Chikara Matsumoto
Tale of Books, Town of Books

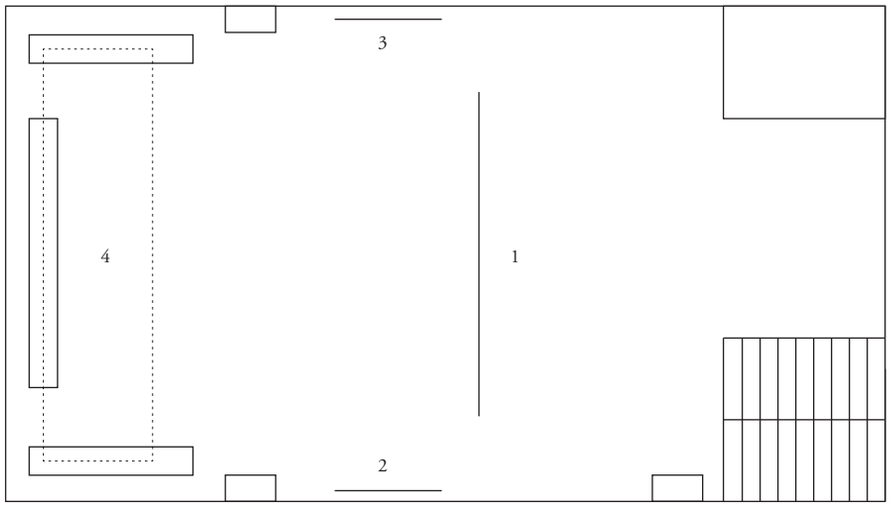
会場マップ

1｜　本の話、本の町｜2011-2016｜松本 力
約30分

2｜　HARPY'S SONG｜2007｜松本力
音楽｜オルガノラウンジ「fogfrog」
4分12秒

3｜　山へ 山をわたる歌声｜2000-2011
音楽｜オルガノラウンジ「ecghost」
13分36秒、13分35秒

4｜　さいごのいんでぃあん｜2012｜ドローイング



本の話、本の町｜2011-2016｜松本 力
約30分

Halo｜2011
音楽｜VOQ「grow glow」
5分47秒

太陽｜2011年
未知のまなざし｜2012
3, 1 and 2｜2011-2015
音楽｜VOQ「conadona」
6分

ヒマヤラ杉の下で｜2012
動物と輪郭｜2016年
音楽｜VOQ「qov」
4分34秒

天使の話｜2011
本のケルン｜1991
2分03秒

カミナリ｜2008
さよなら｜2012
音楽｜VOQ「yona」

Flying Books｜2012
5分12秒

さいごのいんでぃあん｜2012
音楽・VOQ「whoyouare」
5分47秒

HARPY'S SONG｜2007｜松本力
音楽｜オルガノラウンジ「fogfrog」
4分12秒

山へ 山をわたる歌声｜2000-2011
音楽｜オルガノラウンジ「ecghost」
13分36秒、13分35秒

Tale of Books, Town of Books
2011-2016
Chikara Matsumoto
30 min.

"Halo", 2011, music by VOQ 'grow glow'
5 min. 47 sec.

"Sunshine", 2011
"Another View", 2012
"3, 1 and 2", 2011-2015, music by VOQ 'conadona'
6 min.

"UNDER A HIMALAYAN CEDAR", 2012
"Animal and Silhouette", 2016, music by VOQ 'qov'
4 min. 34 sec.

"Tale of Angel", 2011
"Cairn of Books", 1991
2 min. 03 sec.

"Thunder", 2008
"SA YONA RA", 2012, music by VOQ 'yona'
"Flying Books", 2012
5 min. 12 sec.

"Saigo no Indian" - The Last Indian, 2012,
music by VOQ 'whoyouare'
5 min. 43 sec.

HARPY'S SONG
2007
Chikara Matsumoto
Music by Organ-O-Rounge 'fogfrog'
4 min. 12 sec. 28 frame

To the Mountain
The Singing Voice Blowing Across the Mountain
2000-2011
Music by Organ-O-Rounge 'ecghost'
13 min. 36 sec. 11 frame
13 min. 35 sec. 08 frame

山へ
山をわたる歌声

——

オワリやまへ
の
みちゆき
いただきに
たどりつけず
さんぷくで
ひのなかに
すわって
どこにいけば
いいのか
わからず
しかたないとも
あわれだと
あきらめるとも

えいえんにないもの
しはひとつ
おどろいて
めをみはって
はじめから
おわっていたのだから

ひさしく
むを
みつめる
ながめるのでなくて
のぞむもの

やまのうえに
なにがあるか

——

松本 力
本の話、本の町

Chikara Matsumoto
Tale of Books, Town of Books

2018.1.27 Sat —— 3.17 Sat

Minatomachi POTLUCK BUILDING
3F : Exhibition Space

Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F：Exhibition Spaceでは、国内外問わず優れた映像作品を特集し上映するスクリーニング企画を開催します。
今回は、東京を拠点にドローイングからアニメーションを制作するアーティスト松本力の作品を紹介します。再生紙にコマ割りで描かれたドローイングを一コマずつビデオで撮影し、制作した松本の映像は、絵が直接動き出す躍動感とともに、手書きならではの独特の手触りを残した世界観を出現させています。松本の作品に度々登場する「本」をキーワードに選んだアニメーション作品の上映とともに、アニメーションの原画となるドローイングなどの資料展示を行います。
本とその行間を何度も読み返すように、絵と画が向かいあい、連なり、動き出す、アニメーションによる映像体験をご期待ください。

本の町

わたしのいまのきもち
きのうかえってきて
しゃがみこんでいたときの
あまりあらわせないかもしれない
かきたくてかくものだから
いえやたてものが
おおきなほんのようであったらなあ
ほんのなかにはいっていく
とじたときにたいへんか

HARPY'S SONG

にぶいきんいろのあさに
よろず
ならずもののうた
ここにいるときだけ
いわやまのかげ
こうやのはずれに
たおされたもののかげが
なにかいいたげに
よこたわってゆく
おもたいゆうぐれが
ややしかくいまなこに
るびーのようにうつっている
まくらちゃんと
おどっている
なんにんいるかわからない
あのこ

さいごのいんでぃあん

———

もしせかいじゅうのほんをよんだら
たったひとりでもいきてゆけるか

いままでの人間が生きてきたしるしが
本にしたためてあるなら
木からつくられたからだにより
自然と共存している有り様であり
自分たちもよくわからないものが
呼びさまされるような。

これからも都会での日々を過ごす
われわれが
なににたいしてどのように
みしらぬものでありつづけるのかを
しらないはずはないのだが。

ある日、うらぶれたきもちで家に帰ると、本が床に立っていた。
もちろん、出かける前にそうしていったからなのだが。
しばらく、床に座って、本を眺めているうちに、本がまるで家やビルのようにおもえてきた。
子どもの頃に、空のうえから文字を眺めているような、眼がその行間に入り込んでしまうように本を読んでいたことを思い出した。そういうふうに、本の中に入っていけるだろうか。
たくさんのドローイングを描いて撮影して映像にすることは、自分と他者の観点を行きつ戻りつする感覚に、内的な時間の変容をながめていることだった。
ぼくと君のそれぞれのまなざしで内在する外界に、その関係性の先行きを描きたいからだった。
写し手のまなざしが写真に映されるように、線の反復が思考の軌跡を描き、色彩の反射が何を観ているかという意図に、置いてきた道標のようにありありと現れて、それを観ることができる。しかし、その思考技術は不確定なことであり、どこかへするりとすりぬけてしまった、なにかはもうないわけだが、変容した時間の片鱗をいまもとどめていないだろうかと、残り火のような心の残像に探し続ける。
ぼくの記憶が君との外界に及ぼす力で、紙のうえに心の影を落とすことができると、作品は構築される。その非言語領域の象徴を、よくわからないものの伝達によってこそ、まなざしの交換が可能かどうか。心的なドローイングと色彩、そのイメージの領域をとらえられぬものとして、半ば信じ続けることで、映像をつくっている。絵が画を観るということになる。
本の町は、ひとりの内的世界にあるが、人の数だけ、その世界があることの象徴でもある。
独りで自分の見識を獲得するのにかかった時間に、先人たちが記してきた多くの本が、その後ろに連なっているのだと、夢想する空間である。
古本屋や図書館だけでなく、工事現場にすっくと立っていた向日葵の花の前で佇んでいたのは、たった一人がすべてを得られるわけではないことを、本を読む前からもきっと、ぼくの好い関心事であり、長年のうつりかわりだった。
それは知ることのまえに、すこしずれて、知っていたというような記憶である。
さようならをいって、それからであうように。

Halo

——

halo
ハロー
ハロ
はろ
ハロウ

あいさつと
いんどねしあのね
ひかり、ばってん×
ごこう、こうはい、ハロー
かさ、たいようにかかるね
てんまがやってきていた
ペガサス、ぼうしばこのね
まじょか、いぬか、なにか
そして
ハシビロコウ
うごかないとり
じっとみているこちらを
あたまのおおきなね

——

うちはぼうしやだ
いつかテレビをみていたとき
よこになにかのしせんをかんじた
さかさまのひしゃげたぼうしが
オットセイになっていた
むかしトイレにオットセイのシールがはってあって
それがすきでじっとみていた
ふたたびあいにきてくれたんだとおもった

そしてこんどは
なんじゅうねんもまえに
くろいぼうしばこから
だれかがなにかをはがしたしろいあとが
あたまのおおきなペガサスになっていたことに
いまきがついた
すでにちかくにきていて
いつもいたんだなとおもった

たとえなにがあっても
わすれえぬのは
ながれわたるだれかのいしだ
あめのどうぶつえんであったハシビロコウと
ぼうしばこにはりついたペガサスと
インドネシアのこんにちはのかきかた

飛ぶ本

——

本がたくさんとんでいく、
またはおちていくなかで、
そのなかにかかれている、
かかれていないことばは、
かくこころ、よむこころ、
のみちのまなざしにある。

カミナリ

——

東京で大きな雷雲があらわれたとき。
雲の中にすむ何かが、虎がほえているようだと感じて撮影しておいたもの。
どこが光るかわからないから、ここときめて、カメラを向けていた。
電光が描く軌跡が、ドローイングのようで、雷の国の文字のようで、話してるようだった。

さようなら

——

ぼんやりとしたいろに　きみが
たぶん　ぼくもうかんでいる
もうろうとしたなかで　くちづけがある
わからなくても　それをしっている
さようならば　もうなにもいわなくてもいいことがある
ひかりのちいさなつぶがあつまって
まぼろしをつたえあうから

いつもそらにある
いちおくごせんまんキロメートルはなれてかがやく
こうせいからのおんけいともうい
ぼくにとってのきょうじせいが
にんげんにとってのかんがえやいのり
そうぞうのほんしつで
じっさいてきなそくめんだ
ずいちょうのししゃ
つくるものだけど
うけとりたいのは
そういうものだ

——

そらにあるものは　おちるのをおそれる
そらをゆくものは　おちるのをおそれない
うみにあるものは　しずむのをおそれる
うみをゆくものは　しずむのをおそれない
ちにあるものは　つきるのをおそれる
ちをゆくものは　つきるのをおそれない
とりになりたいよ
とりになれないよ
けっかは　いつも　げんいんにあいたがっている

たいようが　きになるんだ

いままでのアニメーション作品と、それを描いた時の感情を詩のように書いた本のようなもの「SAYONARA」を出版した時に、制作したアニメーション。
父が子どものぼくにかいてくれた絵本のなかにいた、山の物の怪の絵がもとになっている。
父は岡山だったので、さとる、という妖怪がでてくる昔話のことかな、とおもう。
記憶の中にそれが居続けていることに気づいて、その姿を思い起して描こうとした。
記憶の中で変容するイメージを、似て非なるものを数多く描くことで、その近似値をとっていこうとしたのが、絵を映像で表現しようとした、はじまりだった。
そして、もういわなくてもいいと、さようならを、つたえてくれた。
ありがとう。

2011年の地震の後に、京都での映像展覧会MOVING2012への出品した「Halo」。
光輪の意と、インドネシア語の挨拶。黒い帽子箱のラベルが剥がれた跡の白いかたちが、まさにペガサス（天馬）にみえることを言及するアニメーションと、太陽を撮影した実写映像を組み合わせる。
ビデオカメラを太陽に向けてしまったが、本当は機械が壊れるのでしていはいけない。
だから、壊れる前に、指と指でカメラの前にスリットをつくり、開け閉じしながら遮光すると、もれでる太陽の光の束で、イメージの光彩を描いた。いつも空にあって、一億五千万キロメートル離れて輝く恒星からの光に、我々が照らし出される恩恵と猛威の存在について。
太陽が気になる。

未知のまなざし

———

じぶんがじぶんでいられるのは
ほんのいっしゅんしかない
だれかが
まなざしをくれているときだけだ

本が飛んでいく、または落ちていくなかで、そのページに書いたことば。

ぼくにとっての未知とは、いままでとこれからの時間で、
ひとりとひとりとの間にある外界を観察する手段と方法、
思考と感情の技術をどのように得るかまたは得られないか。

数多くの本が世界にあって、
そこに書かれてあることが開かれてきたなら、
本を読むものの問いと答えが書かれてあるなら、
閉じられた状態であっても、
書き手と読み手の関係性は、
純粋に浮遊した想像の中に、あるかもしれない。

それがわかるような、想像にかたちをあたえようとするなら。

本のケルン

———

さようならをいって　それから　であう
のに
「およそ　ひとの　いっしょうは　ながく　いろいろなことがあり
どんなにすきなひと　どのように　なつかしいひとたちとも
いずれは　わかれなくてはならず
そうして　こんどは　ひとりの　にんげんとしての　せきにんを　おい
じぶんよりも　おさないもの　ちからよわいもの　あたたかく　つつんで　ほごしてやったり
たすけたりしなければならない　たちばに　たたねばならない
これが　にんげんとして　うまれながらに　せおわされているものだ
だから　そのためにも　できるだけ　じぶんでやれることは　じぶんだけでやってみることに
なれなければならず　それもできるだけ　ちいさいときから　そうすることがよい
いまから　おもうと　ながいようでもあろうが　すぐ　すぎてしまうだろう
くりかえしのきかない　きちょうな　ひびを
めそめそせずに　やりたいように　やってほしい」
という　ちちからの　とおく　ひびいている　ことばだ

さようならをいって　それから　であう
のは　いつかどこかで　あいましょう　といって　やはり　やがて　わかれゆく　ひとへ
じぶんのこころが　あのときに　おわかれを　はなすように
じぶんや　そのひとに　いちばん　ちかいところへ　もどろうとする　たびに　でるからだ
いまになって　じぶんが　いちばん　よくしっていること
じぶんが　いちばん　よわくて　いちばん　らんぼうであることを
じぶんだけが　しっていたことに　きづくんだ
だから　ちいさいときから　じぶんに　はなしかけて　やってきたことは
おきざりのままに　つれだってきたことを
すぎさってしまったと　おもっていたものが　いまもあることを　わかっているのなら
たすけにもどるばかりでなくて
いまの　こころで　あのときに　やりたいとおもったように　やってほしいと
これから　とおくへ　ひびかせて　ゆくから

山登りと釣りと読書が好きだった父がなくなった時に、山の頂上にある石積みのケルンを、父の本で積み上げることをストップモーションで撮影した。アニメーションをつくるまえに、一枚の絵を描くけれど、そうとは知らずに、山を登りはじめて頂上を前に日が暮れてしまったような、もう登り終えていたような、感覚に、途方に暮れた。

天使の話

こどもには
ひとりひとり
てんしがいるよ

いつもみていてくれる
いつもかんじていてくれる

それをわすれないで

そらのかなたに
いけないなんて
おもっていても

れんしゅうすれば
とべるようになって

かえってきたら
れいぞうこに
きのうはなかった
すいかが
はいっていたり

たべものは
のみものも
みんな
ちょこれーとだったり

どんなところへ
いきたいの

いきたいところは
どんなだったの

おおきなまどから
くものむこうがわを
ながめているよ

子どもの頃に、母が地下鉄に乗ると、いつも話してくれた話。
天使が子供部屋の窓辺にやってきて、貸し羽根をつけて、夜ごといろんな国へ旅立つ話。

3, 1 and 2

しゃかいのなかで　おおぜいのなかで
だれかとだれかとさんにんで
だれかとわかれて　いえじをたどって　いえで　ひとりで
あるいはふたりで　ふうふで　こいびとで　ともだちで　おやこで

きがつかないうちにかくしてうしなってすぎさってしまってつたえられなくて
じぶんだけはじぶんのすべて　しっているとこたえられなくて

ろていして　ふんしゅつして
かんがえて　せめきれなくて　わすれて
はなして　つれだって
いままで　これからで

つばさがあるものなら
なにをおそれずに
なにをわすれてしまうだろうか

誰かと誰かと三人でいるとき、誰かと別れて家路をたどり一人でいるとき、親しい人と二人でいるときに、どのように自分で在るか。ぼくの生き方のいままでとこれからが続いていることを考えていた。社会の大勢の中の一人として、誰かと誰かと三人以上でいるときと、その誰かと別れて家路をたどって一人でいるとき、または夫婦や恋人や親友や親子など二人でいるときに、どのように自分で在るか。ぼくは絵を描くから、それに依って他者にとっての自分の在り方をはかってきたところがある。自分は自分で在るか。そんな独りよがりな願いだから、自分の気持ちを隠したり、うまく伝えられなかった。そして、ずいぶんと固執していることがあることを知った。ぼくが、失ってしまったと感じたり、気がつかなかったうちに過ぎ去ってしまっていたと考えていたものが、今までもこれからも変わらずに在ることを考えている。人々の属性から互いの関係性が露呈して噴出して、人が人を責めきれないときに、相手のことを考えることで、自分がそのことに向き合えているのかどうかに直面することがあった。いままでどれだけ多くの人との関わり合いの中で生きて来られたかを考えたら、自分だけは自分の全てを知っているかなんて、答えられない。ぼくがぼくでいられるのは、ほんの一瞬でしかない。誰かがまなざしをくれているときだけ。もし自我なんてなかったとしても、人と人はどのように違うのか、また違わないのか。作品をつくるときに、そのことをいつも考えていたり、忘れてしまっていたりする。だから、人を過去に連れていくものが、未来から連れ戻ってきてくれるものだと想像する。それぞれの土地で、互いを観る時間を編むことが、一つのタペストリーの模様になっていく。自らの夢の中に飛び込んでいくことが、その人の未来をつくっていくことになるかもしれない。人にはそれぞれの時間がながれている、と親しい人が話してくれたことをずっと忘れない。

ヒマラヤ杉の下で

なぜか大きな木があって。
ヒマラヤ杉とシイの木の下で、暮らしている。
ぼくが子どもの頃は、家が祖父の家にはんぶん乗っかって、浮かんでいて。
つまり、2階の位置に、玄関があって、まっすぐ上っていく階段があって。
友だちが遊びにきて帰ると、木＋階段＝木の上に家があった、ゲゲゲの鬼太郎だ、となって。
樹木の越境問題で、残すために手入れしたから、いまや樹形はブロッコリーとなって。
なぜか大きな木を残したくて。読んできた本から得た知識での、分析と思惟があって。
その木の下で、ひとりひとりに、読んできた本が連なるように、互いの思惑が向き合って。

動物と輪郭

技術と恩恵は背中合わせになっている。
命がけで掘って得たものを燃やすエネルギーと、自然に集まったものが形を成すエネルギーと。
二つはずいぶんとまえに分かれてしまったようにおもうけれど、おなじ世界で暮らし続けているから、話をしてこなかった、なんてことはないだろう。花と動物と人も話し続けている。
寝静まった町の灯に浮びあがった草花が夜警のように立っている。
昼間に会えないでいる人と、夜に植物はどうしているか。
あの場所に立って、道ゆく生きものたちの、山の碧、夕方の朱、草陰の紫、四方に色彩を感知する領域に、ものいわぬ活動の呼吸があって。
夜な夜なまなざしのストロークで、"管理された自然"の両義性が写るか、映せるかと観ていた。
父が故郷でみた心象が、絵本のオバケとなって、ぼくの心にずっと居たことが、かたちのないものとして浮かんでいる。
蝶のように銀河が開き、鳥のように空が裂ける、蜘蛛のように光を放ち、境界線などない白昼夢に、あっちからきてこっちへいく交点を成す。その地平の無限遠点へ消失する、鳥瞰する。
そのまなざしを交える、幻想のかたちをなぞっていく。
思うから描くのだろうか、描くから思うのだろうか。
太陽や星明りを見上げるように、内から眺めるのを外から見るような、自分への意志があって。心の影を紙の上に落とす、ということが続く。この非言語領域というか感覚質は、感情の質量を示して、"孤独な報酬"の制作が、方外の実際的側面に呼応する。
包み込まれた、包み込む世界でもある。
絵による映像表現は、絵が画をみるように、最初の一枚の作画と動画の一つ一つが対峙して、観るものが観られるものの自己言及の瞬間に、空間の経験となる。
想像することは、かたちの成否に因らず、本質的に既にはじまって終わっている。
ぼくのストレンジャーの身体の振幅と考察を以て、いままでとこれからを記すことを憶う。
そして、想像を超えていきたい。
人もいつかどこかで、犬や猫だった。鳥や魚だった。花だった。塵だった。星だったのだから。